



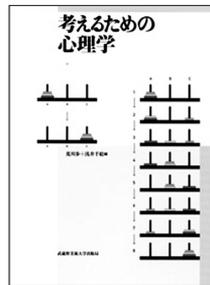
このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

考えるための心理学

荒川 歩

本書が目指したことは、人に認知されている世界の有り様が唯一の世界のとらえ方ではないことを伝え、読者に「そうそう、こういうことある」で終わらない思考を促すことである。『ムサビ』に着任して最初に言われたのは、学生にインパクトを与える教育をしてほしいということだった。「教養を有する美術家養成」を教育理念とする武蔵野美術大学の学生は、卒業後、作家やデザイナーとして社会を担っていく。着任して数年の講義を経験したところで、迷いが芽生えた。「私が受けてきた心

理学教育は『心理学者養成教育』『心理学リテラシー教育』そして対象を心理学としつつも他の学問を学ぶことによっても得ることができるような『学問的素養』の複合体であったと思う。しかし、心理学の教養教育は後者二つを提供することで満足されるのか——迷った末に辿り着いたのが「彼らの世界の見え方を揺さぶること」である。本書を通して、人の心的現実の限界を超えてどのような新しい世界の見えを構築していけるかを問いかけるという、新しい心理学教養教育の可能性に迫りたい。



共編 荒川歩・浅井千絵
発行 武蔵野美術大学出版局
A5判／288頁
定価 本体 2,000 円＋税
発行年月 2012年4月

あらかわ あゆむ
武蔵野美術大学造形学部専任講師。専門は心理学史、法と心理学。著書はほかに、『心理学史』（共編著、学文社）、『境界』の今を生きる』（共編著、東信堂）、『エマージェンシス人間科学』（共編著、北大路書房）、『TEMでわかる人生の径路』（分担執筆、誠信書房）、『わかりやすい犯罪心理学』（分担執筆、文化書房博文堂）など。

仏教心理学 キーワード事典

加藤博己

ついに出た!! こんな本が欲しかったんです。これ一冊で、共に内観法から始まった、「心理学」と「仏教」の基本が学べ、お互いの類似点がリンクで確認できます。どこからでも拾い読みできますが、順を追って読んでいけば、仏教の成立から発展へ、そして、心理学の歴史や分野の概論から、基礎の各分野や、応用の健康心理学、臨床心理学や、トランスパーソナル心理学の基本へ、最後に、フロイトの精神分析からユングの分析心理学へと、図とともに体系的に理解できる構成となっています。

心理学と仏教の両者を架橋する冒険的試みは、「執着と愛着」など、46のブリッジで示されています。さらに、医療・看護・福祉などのヒューマンケアにおける応用を念頭に置き、現代社会の諸問題に仏教と心理学を活かすための項目も数多く盛り込まれています。

読者の皆さんと一緒にリンクを充実させていきたいと思います。本書をたたき台に、西洋の科学である「心理学」と、東洋の叡智である「仏教」との関連について、一緒に議論、研究、実践を深めて参りましょう。



共編 井上ウィマラ・葛西賢太・加藤博己
発行 春秋社
A5判／388頁
定価 本体 3,800 円＋税
発行年月 2012年5月

かとう ひろき
駒澤大学文学部非常勤講師、日本大学理工学部非常勤講師。専門は禅心理学、仏教心理学、学校臨床心理学、乳幼児発達心理学。著書はほかに、『新版：心理学がわかる。』（分担執筆、朝日新聞社）、『ありがとう療法（入門編；実践編；体験談編；カウンセリング編）』（分担執筆、おうふう）など。



モチベーションをまなぶ 12の理論

ゼロからわかる「やる気の心理学」入門！

鹿毛雅治

編著 鹿毛雅治
発行 金剛出版
四六判 / 384 頁
定価 本体 3,200 円＋税
発行年月 2012 年 4 月

かけ まさはる
慶應義塾大学教職課程センター教授。専門は教育心理学。著書はほかに、『子どもの姿に学ぶ教師』（単著、教育出版）、『内発的動機づけと教育評価』（単著、風間書房）、『教育心理学の新しいかたち』（編著、誠信書房）、『教育心理学（朝倉心理学講座 8）』（編著、朝倉書店）、『学ぶこと・教えること』（共編著、金子書房）など。

われわれは、自分や他者の「やる気」と向き合わざるをえない時代を生きている。書店で「やる気」に関するビジネス書や教育誌の特集などが目につくのも、このテーマがわれわれの関心事である証左であろう。ところが、意外にも「やる気」に関する心理学の考え方をきちんと紹介する一般向けの本はほとんど出版されていない。このような現状を踏まえて企画された本書では、12の代表的なモチベーション理論（セルフエフィカシー、自己決定理論、フロー理論など）が、それぞれの専門家によ

ってわかりやすく解説されている。「やる気」を高めることをめぐっては、「競争させる」「ほめて伸ばす」「アメとムチを使い分ける」といった俗論や「ポジティブ思考」「セルフコントロール」のような「心理学的スローガン」が巷にあふれている。それらの言説にいたずらに惑わされない思慮深さこそがわれわれに求められているのではなかろうか。モチベーション理論に出会うことで読者の「やる気」に対する複眼的な見方が深まるのであれば、編者としてこれほどうれしいことはない。



わたしを律するわたし

子どもの抑制機能の発達

森口佑介

著 森口佑介
発行 京都大学学術出版会
A5 判 / 192 頁
定価 本体 2,400 円＋税
発行年月 2012 年 6 月

もりぐち ゆうすけ
上越教育大学講師。科学技術振興機構さきかけ研究者。専門は発達心理学、認知神経科学。著書はほかに、『他者とかかわる心の発達心理学：子どもの社会性はどうに育つか』（分担執筆、金子書房）、*Origins of social mind*（分担執筆、Springer）、*Emotions of Animals and Humans*（分担執筆、Springer）など。

ウィリアム・ジェームズもその言葉を使用し、最近の認知心理学や認知神経科学などの幅広い分野で研究されている「抑制」という能力。この能力の獲得が私たちの心にどのような影響を与え、どのような意義を持つのか。本書は、幼児期の抑制機能の発達に焦点をあて、この問題に対する筆者の考えを述べたものです。

具体的には、抑制機能は社会的世界に適応するために重要な役割を果たす、という仮説のもとに議論を進めました。成人や子どもの抑制機能の研究をレビューした後

に、ロボットやアンドロイドを用いた研究、日本とカナダの幼児を文化比較した研究、ヒト以外の動物を対象にした研究など、筆者自身の実証研究をもとにこの仮説の妥当性を検証しています。

本書の最後に、抑制機能に関する知見を保育や療育にいかに応用し、実践するかについて触れています。幼い頃（から今に至るまで）、筆者自身が静止していることが苦手であり、そういう子どものために少しでも役に立てればと思っています。そのため、保育や教育に関わる方にも関心を持っていただければと思います。